

血液検査で高精度推定

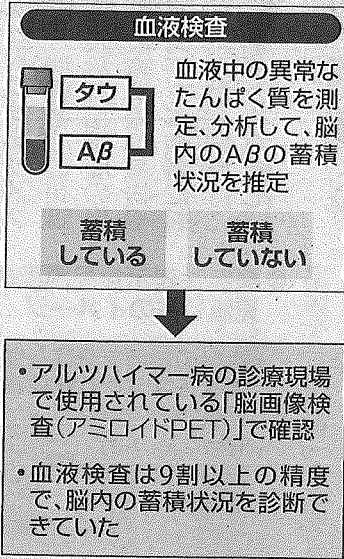
アルツハイマー病発症前

アルツハイマー病の原因とされる異常なたんぱく質が脳内に蓄積しているかどうかについて、血液を調べることで無症状の人でも高精度に推定できる手法を開発したと、東京大の岩坪威教授らの研究グループが発表した。病気の発症前からの診断に役立つ可能性がある。

* 東大など研究

アルツハイマー病は、脳内に「アミロイドβ」(Aβ)や「タウ」と呼ばれる異常なたんぱく質が蓄積すること、神経細胞が傷つき、認知機能が低下すると考えられている。認知症の6〜7割を占めるとされる。異常なたんぱく質は症状が表れる10〜20年前から、脳内に蓄積するとされる。グループは、認知症の症状がない人と、認知症の前段階とされる「軽度認知障害(MCI)」相当の計47

◆ 脳内の異常を血液検査で推定する研究



4人を対象に、血液中に含まれるAβとタウの量を測定して分析。脳内でAβの蓄積が起きているか、起きていないかを推定した。

その上で、脳内の蓄積を確認できる「アミロイドPET」と呼ばれる画像検査で確かめたところ、血液検査は90%以上の精度で診断できていた。論文が23日、国際医学誌に掲載された。

アルツハイマー病の新薬「レカネマブ」は、脳内のAβを取り除き、進行を遅らせるが、対象は検査で認知症の早期段階と診断された患者に限られる。

新井哲明・筑波大教授(精神医学)の話「患者の負担が少ない血液検査への期待は高まっている。今回の手法は精度が高く、将来的には『ふるい分け検査』に使える可能性がある。ただ、アルツハイマー病と診断する検査として活用するには引き続き検証が必要だ」